

は大変面白かった。

会議の運営

—特にlead speaker 方式について—

高橋喜彦, 磯野謙治

孫野長治, 内田英治

今回の会議では、論文の数が多いために、一人のlead speaker が数篇の論文をまとめて発表するという方式がとられたが、会議を円滑に進行させるため各論文の予稿は会議の3ヶ月ほど前に印刷され、lead speaker と座長に送られた。また座長は、全論文を印刷した proceedings を約1ヶ月前に受け取った。また予稿にする図は事務局でスライドにつくられ、lead speaker の要求に応じて映写された。この様な準備には大変な手数が掛ったものと思われる。このような方法の一つの長所(また欠点ともなるが)は客観的に紹介することを心掛けていても、自ずとスピーカーの評価が入って来ることである。この点、第三者として聴いていて興味がある(磯野)。

若い人がスピーカーになった時はオーサーたちと連絡

してあって、スライドを使い、順番にやったのでよかった。老人の時には適当にやっていたが、ある意味ではよいが夫々のオーサーにとっては不満があると思う。スピーカーによってはオーサー達を壇上に並べてそれぞれにコメントをつけさせたのはよかった。しかしそうでない時もあり、各人各様だった(孫野)。

オーサーを壇上にあげるのなら例えば5分間を厳守して当人にしゃべらせ、4つか5つをまとめてディスカッションさせた方がよいと思う。やはり、オーサーが最上のアブストラクトをつくれるからである(高橋)。

一論文5分位しかししゃべれないので、まえもって、オーサーからポイントを知らせてくれると有難いというlead speaker の意見があった(内田)。

(後記) このほか、会議の運営に関して、会場の数、proceedings の出し方などについて、高橋、孫野、内田の三氏に、座談会をひらいて、感想をきかせて載いたのですが、頁数の都合で掲載できなかった点を、お詫びいたします。なお、この会議における発表の題目、著者、アブストラクトは、Bull. Amer. Met. Soc. vol. 49, No. 5, Part 2, 580-624, May 1968, に出ていますので御参照下さい。(樋口記)

気象集誌投稿論文の英文添削について

気象集誌編集委員会

43年12月9日

気象集誌の国際的レベルを高める為の一つの方策として使用外国語が国外で通用するようにする必要があることが各方面から指摘されている。集誌論文の英語が読みにくいということで内容の如何によらず敬遠されているという情報もある。このことに対処して、気象集誌編集委員会では理事会の承認を得て次のような処置を講ずることとした。

気象学会は、次のような条件のとき英文添削を斡旋する。

1. 投稿された論文の内容が集誌に掲載される価値があると編集委員会が判断し、

2. 英文が不十分であり、

3. 投稿者が希望する場合、

集誌掲載の条件として編集委員会が英文添削を斡旋する。

上記のことは英文の添削であって翻訳ではないことを考慮して著者は英文の作成には十分の配慮をされたい。場合によっては和文原稿の提出を求めることがある。

気象学会事務局は適任の英文学者に依頼して上記のための必要な事務を処理する。英文添削に必要な経費(A5版ダブルスペース1頁につき400円)は事務局より投稿者に対する別刷代金の請求と同時に請求される。